小規模小・中学校のメリット・デメリット

１　教育環境や学習環境

（１）メリット

個に応じたきめ細かな指導がしやすい。

（２）デメリット

互いに考えを出し合い，学び合い，高め合おうとする気持ちが育ちにくい。

《具体的内容》

	メリット	デメリット
教育効果	理解度や達成度など個人に応じたきめ細かな学習指導ができる。	集団での学習が必要な教科でその学習内容の十分な習得が難しい。
	個々の課題や問題意識に沿った授業や活動を行うことができる。	多様な考えや意見を出し合い互いに学び合うという経験がしづらい。
	個々の児童生徒の活躍の場を多く設定することができる。	互いの評価が固定されやすく競争心や向上心が育ちにくい。
学習環境	教材・教具など個別の準備や，実験や試技など具体的活動の場を保障することができる。	集団での学習活動が必要な体育，音楽，特別活動などで，効果的な学習を組織しづらい。
	学級担任と児童生徒とが互いに深く結ばれており，安定した教室の雰囲気の中で学ぶことができる。	集団活動や話し合いなど、学習活動をとおして社会性の醸成を図る場の設定がしにくい。
	全校又は学年をまたいだ活動や学習の場の設定など，柔軟な学習形態での学習が可能となる。	学習や活動に広がりが少なく，よりよいものを求めようとする環境をつくりづらい。

２ 社会性の育成と生活環境

（１）メリット

個々の特性をお互いによく理解しており，人間関係が深まりやすい。

（２）デメリット

人間関係づくりの基礎を築く最も大切な時期において，幅広い人間関係や社会性が育ちにくい。

《具体的内容》

	メリット	デメリット
社会性の育成	互いの結びつきが強く，互いの思いや行動傾向を汲み取って行動することができる。	幼い頃からの固定した人間関係をそのまま引きずり，新たな人間関係をつくりにくい。
	学年・年齢間を超えて活動することが多いため，上級生と下級生の人間関係を築きやすい。	多様な活動や人との関わりをとおして多様なものの見方や考え方に触れる機会が少ない。
	全教職員が児童生徒の状況を把握しており，どの場面でもその子に応じた指導が行いやすい。	教師や特定の子どもに依存する傾向が強く，新たな動きを創り出す気持ちが育ちにくい。
生活環境	全教職員が家庭環境や能力・個性などを把握しており，どの場においても指導がしやすい。	親や家のつながりが，子どもどうしの人間関係づくりや遊びなどにも影響を与えやすい。
	一人一人に与えられた役割と出番があり，その責任を果たす中で実行力を育てやすい。	特定の児童生徒の言動が集団に与える影響が大きく，集団活動をとおしての成長が図りにくい。
	地域の人々や全校児童が互いの顔と名前をわかっており，人間的結びつきが強い。	固定的な人間関係が崩れると，その後の関係改善・修復が難しい状況となる。

３　学校経営・運営

（１）　メリット

少人数の教職員公正であるため，共通理解を図りやすく，小回りの利く経営・運営ができる。

（２）　デメリット

教職員が少人数であることや異動サイクルが短いことから，効果的・創造的な学校運営や指導体制の構築が難しい。

《具体的内容》

	メリット	デメリット
学校経営・運営	経営方針を徹底しやすく，全教職員共通理解のもとで，児童生徒への指導体制をつくりやすい。	一人の教職員の考えや言動，存在などが，学校経営に直接大きく影響を与える場合がある。
	家庭や地域の支援・協力を得られやすく，地域に根ざした教育を推進しやすい。	地域の実力者や特定の人の考えが直接的に学校経営に影響を及ぼす場合がある。
	児童生徒，教職員が一体となって伝統行事等，学校の伝統，文化等を継続する体制をつくりやすい。	異動サイクルが短く，多様な役割を担うことから，前年度踏襲といった傾向に陥りやすい。
	教職員の共通理解が得やすく，状況の変化にも臨機応変に対応することができる。	通常担当する以外の業務もこなす必要があることから，教職員が多忙となり，落ち着いた業務がしづらい。
	児童生徒と共に体験的活動を行いやすく，教師と児童生徒との協同体制を構築しやすい。	専門以外の教科・分野も担当することから，専門性を発揮した指導を行いにくい。
	教職員の学校運営への参画意識が高く，責任分担を明確にした運営ができる。	出張等で教職員が学校を離れる場合，代わりとなる指導者がいない状況ができてしまう。

４学校生活全般

前述の３点のほか，その他学校生活全般にわたって検討してみる必要がある。

《具体的内容》

	メリット	デメリット
学校生活全般	児童生徒一人一人の特性や能力を把握しており，どの教職員においても，個別の対応が可能である。	児童生徒を固定的に見てしまいがちになり，指導目標の設定が低くなりがちになる。
	部活動などにおいて，児童生徒の能力や技量に応じたきめ細かな指導ができる。	人数が少なく，チームが組めなかったり対外試合ができなかったりする場合が出てくる。
	学習スペースや教具・器具などを比較的自由に活用でき，個のペースで学習することができる。	校外学習や文集等の各種の学習活動や修学旅行等において，個人分担費用が通常よりかさむ。

これまで，小規模校のメリットとデメリットについて検討してきたが，メリットとデメリットが同じ比重ではないことに留意する必要がある。また，メリットは見方によってはデメリットに変わりうるものでもあるということにも留意する必要がある。

現代社会を生きる上で，今一番必要とされることは，豊かな学力とともに，よりよい人間関係を構築する能力である。「個は集団によって磨かれ育てられていく。」と言われるように，子ども時代にこのような能力を育てていくためにも，一定規模以上の集団の中で過ごす環境が求められる。

固定した人間関係や他からの刺激が少ない生活環境は，経験をとおして自分を振り返ったり，より高い目標に向かって取り組もうとする機会が得られない場合が多い。豊かな感受性と柔軟な思考が育まれる子ども時代に，学校生活をどのような環境で過ごさせていくかは，地域住民や保護者，また，教育に携わる者が真剣に考えなければならないことである。地域の良さ，学んでいる学校の良さを生かしつつ，子ども自身が，ある程度の集団の中で，周りからの刺激や影響を受け，柔軟に，しかも，力強く学び，行動することができる環境であることが望ましい。

そのような教育環境をどうやって実現していくかは，地域の課題であり，新潟県における課題でもある。

新潟県市町村立小・中学校望ましい教育環境整備検討委員会
望ましい教育環境の実現に向けて　（抜粋）